

ナミビア北部における

サンとオバンボの関係史

高 田 明

|| はじめに ||

この小論は、私が進めているサンの文化人類学的調査の一環として、ナミビア北部のサンとその近隣諸民族の関係史のアウトラインを示すものである。「ブッシュマン」としても知られるサンは南部アフリカ一帯の先住民で、多くのグループから構成される。伝統的に狩猟採集に基づく移動生活を営んでいたとされ、現在の総人口は10万人強と見られている（Hitchcock 1996: 13）。

まずサンの研究史にふれておくことがこの小論の意義を考えるのに役立つだろう。初期のサン調査は、現代の狩猟採集民であるサンが人類社会の始原的な姿を復元する鍵になると考え、外部世界の影響を受けていない人々を追求めた。その研究はサンが荒涼とした自然環境にどう適応しているのかを明らかにした。これに対して「見直し派」と呼ばれるグループは、サンは近隣諸民族を含めた政治経済的システムのなかで下層に追いやられた人々の集合にすぎないと主張し、それまでの研究者「伝統派」と呼ばれるを「孤立した自律的なサンの社会」という幻想を創出してきたと批判した。

伝統派は、サンと近隣諸民族との接触があった地域、その程度、さらにはその解釈に関して見直し派に反駁した。この「カラハリ論争」を契機として、伝統派と見直し派の枠組みを超えてサンの歴史を復元する動きが活発になった^{†1}。

こうした研究史を受けて、現在では近隣諸民族との関係史を見すえたうえでサンの文化を考えていくことが求められている。こうした試みはまた、エスニシティに関わる人類学的な思考の潮流や先住民の権利をめぐる運動とも響き合う。私がナミビア北部に住むサンの一グループであるクンを調査対象としたのにはこのような背景があった。ナミビア北部のクンは、サンのなかでもっとも研究蓄積があるジュホアンと言語をはじめとする社会システムが類似している。その一方で、近隣諸民族とは比較的関わってこなかったとされるジュホアンとは対照的に、クンはオバンボと総称されるバントゥー系の農耕牧畜民と長らく多面的な関係を持ってきた。オバンボはこの地域のマジョリティであり、現在の国政の主翼を担っている）。これら

†1 カラハリ論争の詳細や依拠した文献については高田 2003: 63-64]を参照。

から、クンはサンの文化の独自性や多様性を考える上で貴重な位置づけにある(高田 2003: 31-35)]。

以下ではナミビア北部におけるサンとオバンボの関係史を素描する。この地域のサンの多くはクンであったと考えられる。ただし、文献資料ではたいていサンの下位グループは同定されていないので、その場合はすべてサンと記す。

1 先住民サン

サンは他の人々に先駆けてナミビア北部を居住域としていた。これに対して後のオバンボにつながるバントゥー系の人々は、紀元後に北方から移動してきて、ザンベジ川の周辺でサンと出会ったといわれている(William§ 1994: 32, 73)]。オバンボの伝承によれば、彼らの祖先がこの地を初めて訪れたとき、樹木の下で明るい褐色の肌と大きなお尻を持つ人がしゃがんでいたという。ここで先住民として描かれている人は、サンと思われる身体的特徴を備えている。一方サンは、自分たちの祖先は湿地に育つ睡蓮の葉から起こったと言い伝えている(William§ 1994: 22, 85-86)]。

出会った後も、サンとオバンボは長らく棲み分けを行っていた。サンとオバンボの間には、獵場や居住域の境界についての合意があったといわれる(William§ 1994: 48, 96-97)]。境界付近では両者の協力がみられた。オバンボは土地を居住地と荒野に二分し、季節的な牛の放牧地を後者に設けていた。荒野はサンの領域でもあった。サンはこの地での動植物や水の利用法を熟知していた。オバンボは荒野の開拓を徐々に進めていったが、それにはサンの手助けが不可欠であった(Kreik§ 1996: 325, 361, 409)]。またサンは、毛皮や鉄と交換にオバンボから農作物、タバコなどを得ていた(William§ 1994: 88, 118)]。

2 複合社会の成立

サンとオバンボは次第に相互依存の度合いを強め、複合社会を構成するようになった。オバンボは18世紀頃からいくつもの王国を発達させ始めた。サンは交易のパートナーであっただけではなく、ボディガードや専門のハンターとして王国に労働力を提供していた。諸王国の間ではしばしば戦争があり、サンのもたらした毒やその兵力はこうした勢力争いの行方を左右した。興味深いことに、オバンボの王族とサンの間では組織的な通婚が行われていた。例えば、オバンボのグループであるクワンビの王国では、王は第一妻をサンから娶るという慣習があった。オバンボに広くあてはまる母系制のクラン・システムを反映して、クワンビの王国では初期の幾人かの王がサンだとみなされていた。そしてサンは王国全体に対して大きな影響力を持っていたという。やはりオバンボのグループであるンガンジェラの王国では、サンとの通婚が王族に限らず広い範囲で行われていた(William§ 1994: 116-141)]。

文化的に異なる集団が合わさって社会を形成するときには、その包括的な単位を維持するために、しばしば一方が他方に服従するという政治的な秩序を伴う(Smit§ 1965: 62)]。サンとオバンボは、徐々にこうした政治的関係を形成していった。クワンビの王国では、18世紀の後半から19世紀の前半に、サンとみなされていた王の跡を継いだ王がサンと戦い、王国における彼らの影響力を払拭した。ンガンジェラの王国でも、その年代ははっきりしないが、人口の増加とともにサンに対して強硬な態度がとられるようになり、ついには彼らは王国から追い出された(William§ 1994: 116-141)]。19世紀の末に猛威をふるった牛疫は、こうした動向

に拍車をかけた。例えばクネネ川下流域では、1880年代ごろまでサンは火器で武装し、独自の政治機構を備えていた。だが牛疫が起こった後は、弓矢での狩猟や採集に基づく移動生活を営むようになった。オバンボに奴隷として扱われる者も現れた (Kreiké 1996: 53)。

3 宣教団との関わり

ナミビア北部は、19世紀後半から世界システムとの関わりを加速させていった。もっとも、1884年に現在のナミビアを保護領(南西アフリカ)としたドイツ帝国の影響は南部・中部の「ポリスゾーン」に限られていた (Hellberg 1997: 76)。第一次世界大戦後に南西アフリカの統治を引き継いだ南アフリカ連邦も、ナミビア北部には間接統治で臨んだ。そして、南部の白人農場や鉱山への安価な出稼ぎ労働力の供給源とした (Kreiké 1996: 121, 181-182)。この間、ナミビア北部に直接かつ大きな影響を与えたのは宣教団であった。1870年には、フィンランド伝道協会(FMS)がドイツ系の宣教団の協力を得てナミビア北部に伝道所を開設した (Hellberg 1997: 71)。本国での民族主義運動^{†2}を反映して、FMSの活動は南部アフリカを覆いつつあった帝国主義や人種政策とは一線を画していた。FMSは「真の帰依」を目指すとともに、地域の権威と緊密な関係を結ぶことで地域の人々の信頼を得ていった (Hellberg 1997: 208-209)。20世

紀前半に現地教会が設立された後もFMSはその活動を支援し続けた。

現地教会として設立されたナミビア福音ルーテル教会(ELCIN)は、FMSと協力して1950年代からナミビア北部でサンに向けた活動を始めた (Jansen et al[1994: preface])。このころサンはオバンボに政治経済的にかなり依存していた。日雇労働や家畜の世話のために、多くのサンがオバンボを定期的に訪問したり、その村の周辺に住んだりしていた。黒人を分割統治する南アフリカ連邦の政策によりナミビア北部は「オバンボランド」となったが、この地域に分散していたサンは「地図にさえ載らなかった」 (Dienef 2001: 235)。

ELCINはブッシュを切り開いてサンの村を設立した。私が調査を進めているエコカ村(以下、エコカ)は、なかでも最大規模のものである。エコカには多くのサンが住むようになり、近くの村のオバンボもその周辺に移住してきた。フィンランドからの宣教師やオバンボの牧師の指導の下でさまざまな活動が行われた。サンのために広大な共同農場が開拓され、トウジンビエをはじめとする作物が栽培された。開村以来の住人によれば、その収穫だけで生活していくのに十分であった。さらに余裕のある者は、自分の世帯のための畑を耕した。エコカに現在住むクンの世帯のうち、8割近くが共同農場で耕作し、5割近くは各世帯用の畑を持っていた(表参照)。加えてELCINからロバ、ヤギ、牛を購入し、所有していた世帯もあった。ELCINの高等教育を受けて牧師になるクンも現れた。また、サンの言語による民話の集録や聖書の翻訳、識字教育も進められた。オバンボの下での日雇労働も行われていたが、その関係は良好だったという。

†2 フィンランドは1809年から自治国としてロシアの影響下におかれていた。だが、ヨーロッパにわき起こった民族自決主義を反映し、19世紀後半にはフィンランド語の地位向上などを求める民族主義運動が盛んになっていた。この運動はフィンランドの独立(1917年)につながった。

表 エコカのクンの生業活動¹⁾

(単位: 戸, かつこ内%)

	狩猟採集	農 業	農 業 (共同農場)	日雇労働 ²⁾ (世帯別畑)	道具制作 ³⁾	家畜世話 ⁴⁾
解放運動前	7 (54)	10 (77)	6 (46)	1 (8)	1 (8)	2 (15)
解放運動中	9 (56)	9 (56)	4 (25)	10 (63)	0 (0)	1 (6)

- (注) 1) 1998 年にエコカのクンの全世帯を戸別訪問し, 解放運動前および解放運動中にエコカに住んでいた世帯 (前者は 13 戸, 後者は 16 戸) に当時営んでいた生業活動を聞いた (複数回答可)。
 2) オバンボを訪問し, 日雇労働を行ってトウジンビエ等を支給されるもの。
 3) 販売用にナイフ等の道具を制作するもの。
 4) オバンボに依頼されて, 長期にわたりその家畜の世話をを行うもの。

4 解放運動とサン

地域に密着した布教活動を続けていた ELICIN からは, 植民地主義に疑念を抱く者が育っていった。ELICIN の指導者は, 政治組織である南西アフリカ人民機構 (SWAPO) との密接な関係の下に住民の指導者となっていった。次第に SWAPO による南アフリカ連邦からの「解放運動」が活発になり, ELICIN もこれを支持した。ELICIN の解放運動へのコミットメントは後に他の教会の協力を得た (Hellberg 1997: 220-221)]。これらの教会はナミビア教会評議会 (CCN) を形成し, 南アフリカ連邦の人権侵害を正面から批判した (Nambale 1994: 165)]。

激化する戦争は, 1970 年代後半になると ELICIN のサンに向けた活動を妨げるようになった (Jansen et al 1994: preface)]。エコカは南アフリカ軍の支配域と SWAPO の活動拠点の間にあった。住人によれば, 南アフリカ軍は共同農場での活動を妨害し, その収穫は激減した。多くのクンの世帯がオバンボの下での日雇労働に依存するようになった (表 1)]。当時, オバンボランドからは年間

5 万人ほどが「契約労働システム」によって南部に送られていた (Hellberg 1997: 9-12)]。解放運動のためにも, 7 万~10 万もの人々が国外に活動の拠点を移した (Nambale 1994: 157)]。これらによる労働力の不足をサンが補ったことは想像に難くない。

多くのサンは危険を承知でエコカに留まったが, 解放運動に参加する者や難民となる者もあった。また, 南アフリカ軍に協力するサンもあった。南アフリカ軍は, サンのブッシュに関する豊富な知識をゲリラ戦に用いるだけでなく, 先住民であるサンを政治的なプロパガンダに利用しようとした (Uys 1993: 139-144)]。SWAPO を支持するサンでさえ, その兵士からスパイの嫌疑をかけられることを怖れなくてはならなくなった。

5 ナミビア共和国の独立

解放運動は国際的な支援を得て, 1989 年には総選挙が実施された。SWAPO はこの選挙に勝利し, 翌年 SWAPO を与党としてナミビア共和国が独立した。ナミビア共和国は進んだ憲法を備え, 多文化社会を前提とした民主主義を実践しようと模索

している。さまざまな国際組織もこれを支援している。だが、共同体間の多様性と機会の平等を両立させていくことは容易ではない。前者に基づく現実と後者の理念はすでに社会生活のさまざまな面でぶつかり合い、物議を醸している (Diener [2001: 252-257])。

なかでも深刻なのが再定住に関わる問題である。独立により、国外に出ていたオバンボを中心とする人々は続々とナミビア北部に帰還してきた。エコカでも ELCIN がサンを再定住させる活動を始めた。この活動は政府によって引き継がれ、現在に至っている。ただし、これは独立前の活動の繰返しではない。情勢はさまざまな面で変わっている。農耕牧畜のための土地を拡張しようとするオバンボのなかには、解放運動で積極的な役割を担わなかったとされるサンが国際組織や政府から支援を受けていることを快く思わない者もある。こうした状況で、オバンボとサンはトラブルの種をいくつも抱えている。

結 語

ナミビア北部のサンは、オバンボと数世紀にわたって多面的に関わるなかでともにその社会的文脈を育んできた。さらに植民地政府、宣教団、ナミビア共和国といった、より強大な権力ともユニークな関わりを築いてきた。したがって、ナミビア北部のサンに「孤立した自律的な社会」というイメージはあてはまらない。

その一方で、サンをこうしたさまざまなアクターから隔てる文化的な境界は連綿とリアリティを持ってきた。これはなによりもまず、サンのエスニシティに現れている。サンのエスニシティは、オバンボ、植民地政府、宣教団、ナミビア共和国などによるサンのとらえ方、およびサンが自分た

ち自身に感じる意識という二つの側面を持っている。そして、これらは相互に反映しあってきた。いいかえれば、さまざまなアクターがサンに向けた視線とサンの自己意識の間の絶え間ない相互作用が、サンのエスニシティを形作ってきた。エスニシティは、ある弁別的差異に社会的な意味をわりあて、他を無視することで生じる文化的構築物である (Saugestad 1998: 17)。サンのエスニシティについての理解を深めるためには、上記の相互作用において何にどのような意味が与えられてきたのかを分析していく必要がある。

見直し派はサンと近隣諸民族との政治経済的な関係史について重要な事実を明らかにしてきた。しかしながら、サンをそうした政治経済的システムのなかで形成された下層階級の集合体にすぎないと結論づける (Wilmse 1989: 32, 270-271, 324-325) のは一面的にすぎるであろう。エスニシティの文化的な次元を政治経済的な状況と混同してはいけない。両者の関係はさまざまで、それ自体が興味深い研究テーマとなっている (Diener [2001: 251])。サンが政治経済的により広い社会のなかに位置づけられることとサンが研究に値する文化的統一体である (Barnard 1992: 238, 298) ことは矛盾しない。ナミビア北部のサンは、オバンボや国家との関係において新たな局面を迎えている。権力の構造が再編されるなかで、サンの文化がどのように伝えられていくのかを見つめていきたい。

〔参考文献〕

- 高田 明 2003 「南部アフリカのサンにおける社会的相互行為の発達に関する研究」(京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文)。
Barnard, A. 1992 *Hunters and Herders of Southern Africa: A Comparative Ethnography of the Khoisan Peoples*, Cambridge: Cambridge University Press.

- Diener, I. [2001] “ Ethnicity and Nation-Building: Towards Unity Respectful of Heterogeneity?” in I. Diener and O. Graefe eds., *Contemporary Namibia: The First Landmarks of a Post-Apartheid Society*, Windhoek: Gamsberg Macmillan Publishers, pp231 - 257.
- Hellberg, C. [1997] *Mission Colonialism and Liberation: The Lutheran Church in Namibia 1840-1966*, Windhoek: New Namibia Books.
- Hitchcock, R. K. [1996] *Kalahari Communities: Bushmen and the Politics of the Environment in Southern Africa*, IWGIA Document No.79, Copenhagen.
- Jansen, R., N. Pradhan and J. Spence [1994] *Bushmen Ex-Servicemen and Dependents Rehabilitation and Settlement Programme, West Bushmanland and Western Caprivi, Republic of Namibia; Evaluation, Final Report, April, 1994*, Windhoek: Republic of Namibia.
- Kreike, E. H. [1996] “ Recreating Eden: Agro-Ecological Change, Food Security and Environmental Diversity in Southern Angola and Northern Namibia, 1890-1960,” *Ph. D. Dissertation, Yale University*.
- Nambala, S. [1994] *History of the Church in Namibia*, Spokane: Lutheran Quarterly.
- Saugestad, S. [1998] *The Inconvenient Indigenous: Remote Area Development in Botswana, Donor Assistance, and the First People of the Kalahari*, Tromsø: Faculty of Social Science, University of Tromsø.
- Smith, M. G. [1965] *The Plural Society in the British West Indies*, Berkeley: University of California Press.
- Uys, I. [1993] *Bushman Soldiers: Their Alpha and Omega*, Germiston: Fortress Publishers.
- Williams, F. N. [1994] *Precolonial Communities of Southwestern Africa: A History of Owambo Kingdoms 1600-1920*, (2nd ed.), Windhoek: National Archives of Namibia.
- Wilmsen, E. [1989] *Land Filled with Flies: A Political Economy of the Kalahari*, Chicago: University of Chicago Press.
- (たかだ あきら／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)